Izui, Hisanosuke
Kokugogaku Goi no kenkyu

国語学

語彙の研究

泉井久之助

P Izui, Hisanosuke
305 Kokugogaku Goi no kenkyu
I95

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

國語科學講座

— Ⅱ —

國語學

語彙の研究

泉井久之助

株式會社
明治書院

國語科學講座

—III—

國語學

語彙の研究

泉井久之助

株式會社
明治書院

目次

P
305
I95

LIBRARY
SEP 1 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

語彙の研究

泉井久之助

一　語彙の一般的構造

語彙は意義質として見た言語單位の集まりである。日本語で「舟は」といふとき「は」は單に文法關係をあらはすのみであつて、それ自らとしては何ら具體的な內容を有してゐない。「舟」なる要素を文法の軌道に乘せて文中における一定の關係の中に入らしめるだけのものである。我々はかうした「は」の如きものを文法質或は形態質といひ、「舟」の如きものを意義質といつてゐる。言語によつてはこの二つの部分の區別が明瞭でなく、例へばラテン語の如く navis といへば已に「舟は」であつて、「舟を」といふときは navim とし、「舟」と「は」又は「を」とを分出することの出來ないものや、同じ樣に又ロシヤ語の如く lodka と云へばやはり「舟は」であつて「舟を」は lodku といはれ單なる「舟」だけを析出し得ないもの、即ち意義質と形態質が離しては考へられないものもあるが、反對に支那語の如く一語一語の殆んどすべてが純粹な意義質であつて單にそれらが文中にあらはれる際の文章法的關係において文法質を得てゐるもの、即ち明瞭に意義質を取り出し得る言語もある。一口に單語といつても內容は言語によつて一定しないものであるが、

これらを通じて云ひ得られることは、我々が一定の音韻系列を單語として認めるのは、その中に多少ともの意義質が認められるからである。勿論意義質はすべての單語において同一の强さ同一の分量を以てあらはれてゐるのではない。その程度に應じて單語にも「單語性」の高いものと低いものがある。何れまでを單語と認めるかは場合や見方によつて一定しない。故に嚴密に云つて、語彙とは單語の集まりではなく、意義質の集まり及びその體系と見なければならない。しかし素朴に見て單語の集まりと見做すことも出來るであらう。否、實際上の語彙の取扱においては單語を以て進んで充分である。私は以下單語といふ術語をよく使ふであらうが、それは以上のやうな意味においてであると思つて戴きたい。

そして文法質の集まり及びその働き方の體系が所謂文法であり、また形態論である。しかし文法と語彙とは必ずしも一定不變の固定した關係の中に立つのではない。語彙は一定の文法の軌道に乘つて言語における活動要素たり得るといふのみであつて、一定の語彙には必ず一定の語彙が對しなければならないと云ふのではない。語彙は種々な要素が方方から來り加つて、言語を構成する諸種の體系の中でも最も變動し易いものである。日本語の語彙に關しても本來の日本語の外に多くの漢語、少數の南洋語朝鮮語梵語、近來は殊に多くの西洋語を加へてやはり一定の文法の軌道の上を滑かにすべつてゐる。歐羅巴や西南アジアにゐるジプシイの言語はアルメニアのジプシイを除く外、すべて語彙の大部分を行く先先の土地の語彙を攝つてゐるのであるが、文法だけは自らのものを使用して不便を感じない。吾國における漢文の讀方なども、支那語を語彙的要素に碎いて、その語彙を日本語の文法にかけて廻したものといふことが出來る。

本來自らの言語に屬しない他の語彙からの借用要素を使用することは、何れの言語を問はず、何れの時代にもあつた事に相違ない。人類に交通があり、交渉があり、人生的活動がある限り、最も太古から行はれてゐた避くべからざる社會的、否、人間的事實であらう。しかし我々は實際の言語活動にあたつては、我々の使用し所有する語彙にかくの如き起原的差異のある事には注意しないのが常である。何れの要素も我々の言語活動に必要なる單位として全く同一の取扱を享けてゐるに過ぎない。語彙はその言語を使用しつつあるものに取つては全體として一様無差別の統一體である。際立つて著しい漢語、未だ新しい洋語のほか、和語・漢語・洋語は相倚つて一の今日の日本語の語彙體系の平原を構成してゐるのである。

單に全體としての語彙が起原的に由來的に問題とせられないのみならず、語彙の中の一語一語も亦その語源その由來を意識せられることなく用ゐられる。少くともその使用せられる瞬間には一般にさうである。今日「吟味」と稱せられるものは、それが前代にあつては「詩句を吟じ味ふ」ところの玩味品評の語であつた事を知つて用ゐるものは少い。「揚句」についても同じ事である。その「前身」を意識しないところ、意義を必要としないところから、身元が忘れられ、ここに所謂俗間語源解なるものが生れる可能性がある。近頃街道に賣られてゐるパンケーキについては見る人の殆んどすべてがパン卽ち「鍋」で揚げた菓子である事は知らず、パン卽ち麵麭と解するであらうし、元より賣つてゐる人にもかかる「正しい」意識はないことと思はれる。この種の語源解を見破ることにおいて我々は驚くほど鈍感なのであつて、地下足袋が直(ぢか)接に地を履む足袋であることにすらも氣がつかないのである。語彙とその要素がその由來を問題とせられない程度を我々は推して知る事が出來る。

從つて本來同一の語彙單位であつたものが使用の相違のため分化したものについても、我々はその身元を洗はずにそれぞれ別個の單語として扱つてゐるのである。上・神・髮・狼、何れも元は「上方」を指し天を指し、尊ぶべきものをさす一の「カミ」から來てゐるにかゝはらず、我々に取つては已に同音異義の別個の單語(ホモニム)であつて、我々はかかる關係を知らない。否、知つてゐては、一つ一つ意識してゐては、言語を行ることが出來ないのである。厩は馬屋であり、蚊帳は蚊屋であることすら我々の意義には忘れられ勝である。

語彙の成立過程と現在の意識とは必ずしも一致しない。語彙にあつては常にその現時性を注意しなければならぬ。また十年前の日本語、二十年前の日本語、更に遡つて明治初年或は舊幕時代一般に行はれてゐた、日本語の語彙を思ふならば、時代の遡るにつれて、普通に使用せられてゐた洋語の數も少なく、漢語の量も種類も亦共に今より少なかつた事に注意せられるであらう。これに並行して和語の數も使用の範圍も廣かつた事も亦明らかな事實である。しかもこれらの時代時代における人々には當時當時の語彙が全體として一の緊密な全體をなしてゐた事は、今日の我々に對する今日の日本語の語彙と同樣であつたに相違ない。語彙の體系には變化があつた。奈良朝以前の日本語の語彙には殆んど和語のみが見出されたであらう。奈良朝に入つてはやゝ漢語が自由に混用せられ、次第に日本語の語彙の中に確固たる地步を占めつつ當時の語彙體系中に融合せられて行つた事が見出される。平安朝をすぎ鎌倉期室町時代となれば、社會や政治の上の激しい變動は語彙の上に鋭敏にあらはれ、和語漢語を問はず全體的に前の時代とは甚しい入れ替へが行はれてゐる事が看取せられる。しかし洋語は未だ何らの勢力を我が語彙の上に及ぼしてはゐなかつた。戰國から德川時代にかけて洋語は日本語の語彙の上に力強くあらはれはじめて來たのである。語彙それ自體において

は內部に多大の變化を經ては來たが、それぞれの時代の人々に取つてはやはり破綻のない一の統一體であつた。語彙は統一體なるが故に圓滑に働く事が出來るのである。

語彙は統一體であるから、同じ內容をあらはすに初め a なる意義質があり次に b なる意義質があらはれて來た場合、a と b は相互に恬然として同じ內容をあらはしてゐる事はない。例へば日本語彙中の洋語にしても、はじめのバッテ(イ)ラに對して英語のボートが後から登場して來たとき、この二つは相互に反撥し或は意味合の擔當區域を分擔するに至り、或は地理的に相互から隔離せられ、或は社會的地盤を別にするに至る。語彙の一部における變動は直に他に波及する。語彙中の一要素が變動するとき他の要素もこれに伴つて大なり小なりの影響を受けざるを得ないのである。「着物」にしても「洋服」なる物と單語が出來てから如何なる分野の局限を受けた事であつたか。殊に服(フク)が洋服のみをさす事となつて、和服は「和」の斷り書きを必要とすることになつた。同一の事項をさす名稱が二つ以上になる場合、一方或は双方が意味合をかへ地盤を分けるのは一般の過程である。單に事物の名稱に止まらない。動詞形容詞の如きにあつても同樣であつて一般に同一概念同一事項をあらはすに同一價値の意義質が數個共存することはあり得ないのである。ドイツ語についても speisen-essen（給食する）、springen-hüpfen（跳ねる）、schlagen-hauen（打つ）の如きがあるが、多くの人々に對して speisen することは出來ても essen することは出來ない。コップは springen しても hüpfen することはない。時計は schlagen するが hauen しないのである。語彙の體系中にはかくの如き「言語經濟」が常に行はれてゐる。

單に同一事項をあらはす數個の意義質において「經濟」が行はれるのみならず、同一語形が異なる事項をあらはす場

合にもかゝる形の上の分化が行はれる事がある。例へば新潟地方には「シ」と「ス」の區別が不明瞭なため、鹽もスオと發音せられ、延いて梨と茄子は何れもナスとなり區別が着かない、卽ち梨の方は木に成る故にキナス(木梨)として茄子との混同を免かれてゐるのである。またフランスのガスコーニュ地方では古い -ll- は -t に變つてしまふ傾向があつたため、ラテン語の gallus (鷄)はこの地方では gat となり cattus (猫)から來た gat と同じ形になつてしまつた。卽ち猫と鷄の如きものを同一の語形を以てあらはして置く事は不便でもありまた危險である、殊に農家にあつては。卽ち「鷄」の方を姿態の類推から牧師に引きあてて vicaire 卽ちその地の方言でいふ bigey にかへてしまつた。時には雉(faisan) にあてはめて azï と云ふ事もある。猫は gat であり鷄は bigey である。語彙にはかくの如くして常に表現の明確を求める傾向が働いてゐると共に、所謂シノニムを利用して表現を微細ならしめる作用が動いてゐる。シノニムとは同一內容と價値の單語の群ではなくして同一事項に關してニュアンスと價値を異にする表現の手段のことである。勿論この傾向は言語によつて異なり、同一言語であつても時代により、殊に職業團體によつて大に異なる。一般に或る方面の職業を掌る人々の言語はその方面の表現には極めて細かい區別を求めつつあるのは事實である。學問における所謂術語の如きもこの意味においては一の職業語と考へる事が出來る。一般語の語彙の豐富化は特殊團體からの影響である事が多い。分業の組織は一般語を、然らざる時よりも遙に速かに發展せしめるものである。

さて漢語が勢力を得て來たのは、我國が支那との交渉の下にその文化的支配を受けた結果であり、近來洋語若しくは洋語になぞつた和語漢語が我々の語彙の上に勢力を張つて來たのは、南蠻の渡來以來、精神的物質的に西洋の文化的影響の下にあつた事を示してゐる。印度系のウルドゥ語がひどくペルシヤ語彙に支配せられてゐるのは古くからペ

ルシャの文化宗教の支配の下にあり精神的にはペルシャ的生活を送つて來たからである。アラビア語の抽象的方面を表はす語彙要素が多くギリシャ語から由來するものであることも同じ理由である。アイヌ語に日本語の跡を認める事の出來るのは上代のアイヌも吾々の古き文化の或方面を輸入し、その影響の下に立つてゐた事を示す。語彙は言語を構成する諸部分の中にあつて、その言語を使用する團體若しくは民族の文化的位置を最も明瞭にあらはす部分である。從つて文化的位置が移動すれば語彙の構成も亦相應じて變らざるを得ない。古代支那の文化圏にあつた吾國が近世以降次第に西歐文化圏に入る事によつて、語彙の上にも我々の知るやうな變動が起りつつあるのである。文字の弘通もやはり文化圏の問題と關係する現象である。我々が漢字を使用する事は同じく支那文化圏の中にあつた明證であり、今ローマ字運動が起るのは西歐文化圏に入つてゐるが故である。ただ文字は一旦採用せられた以上語彙の如くに滑らかに替へてゆく事が出來ない。語彙はあまり我々に近しいためか右にも見た如く却つて我々には無意識的な存在となつてゐる。且つ部分的に差しかへる事も出來る。目に立つ文字にはかゝる事も許されない。その言語民族の文化史的位置を辿るためには文字よりも語彙の方が便利である。しかしこの際には極めて方法論的な手續が大切である。單純に語彙を通じてその民族の文化を大觀しようとするのは極めて危險である。しかもかゝる遣り方は今日にあつてもなほ結論を急ぐ社會學者歷史學者には多い。方法論的に進むならば此に依て比較的微細な點までもその民族の歷史を辿る事が出來る。ミクローシッチュが歐羅巴のジプシーの進路を調べたのは彼らの語彙における外來要素の研究によつてであつた。彼らは中世の印度から中世印度語を持つて(勿論方言的に樣々である、Jules Bloch, L' indo-aryen. Du véda aux temps modernes. Paris, 1934. P. 18. その他)、西方へ侵入して來たのである。また印度の梵語が最

も古い時代から印度南部のドラヴィダ語や東北部のムンダー語と交渉してゐた事もシルヴアン・レヴィ氏やプシルスキー氏が語彙研究によつて次第に明晰にしてゐるところである。

ただに右の如き移動し易い對外的交渉の方面のみならず、内的に見ても語彙は該言語團體の精神史的變遷の一部を明らかにしてゐる事がある。日本語本來の語彙は最も古い我々の文獻によつて窺はれる如く、感情若しくは感情的方面或は受動的思惟の方面を示す語彙には豐富であるに反して、理智的推理的、或は今日の西洋、古代の支那印度の哲學に見られる如き能動的思惟の方面を示すものには非常に乏しい。後來佛教を入れ、儒教を輸入し、哲學的な思索が行はれるに至つては、それらの表現は一に外來の表現によらなければならなかつた。主として漢語であり、漢語の背後には印度の思索が流れてゐる。元來言語は或程度まで我々の先驗的認識形式となるものである。我々は生れ落ちるから修得した言語に許されてゐる表現の數だけの周圍を見、表現以上に進んで新しい世界を見出す事は凡俗のよくなし得るところではない。普通に我々は言語——それも特に母語——の描く枠の中に「精神生活」をしてゐるのである。古き時代の日本語彙に能動的な思惟の概念をあらはす表現がないことは我々の祖先が思惟を意識に上すほど能動的に思索しなかつたこと、思索の觀念のなかつた事を示すのである。この事は客觀的の事實としてわれひと共に認めなければならぬ。西洋哲學が專ら行はれる今日にあつても、用ゐられる語彙は西洋の語彙を漢譯したのが普通である。尤も解釋學的な哲學の傾向が西洋に起つてから我國にも或點まで和語を用ゐて譯出表現する傾向が見えるけれども、これにもその背後に西洋の思索の息吹のある事を忘れてはならない。本當のところを云へば、純粹の和語は哲學的思惟を行るだけの發達を遂げてはゐず、またゐなかつたのである。或は當初哲學的思惟に進まんとしたときに、進歩した

外國の思索の影響を受けたために自らの哲學を建設し、自らの言語を以てその表現たらしめる訓練の機會を失ひ、敢て自ら別に表現を創造する必要を認めず、また認め得なかつたとも見る事が出來るであらう。しかし要するに當初我我の祖先は哲學的思惟に無關心であつた事は事實である。彼らは思惟に向はず、感情に奔つた。詩においては思想歌が少なく敍事詩が發達せず、抒情的方面のみに勝れてゐた。この傾向は今日の歌壇においても殆んど變つてゐない。語彙の哲學的方面が發達の遲れた事と、今もなほ日本の社會と哲學とのギヤツプが決して狹くなつたと云ひ得られない事とが、深いところで關係することゝも考へるが今は述べてゐる事は出來ない。要するに我々は我々の語彙を檢する事によつて、祖先が如何にして外來の哲學、否更に明確に云へば外來の哲學語彙によつて、次第に思惟に慣れて行く事が出來たかを知る事が出來る。語彙には該言語團體の經過し來つた內面的な精神性の歷史があらはれる。

——內的に外的に、語彙には文化があらはれる。時の流れの或一點を取り、この點を通じて橫に切つた面にあらはれる語彙の斷面は常に一の體系を構成してゐる。しかし時の流れと共に語彙の中には或部分において變化置換が行はれてゐる。嚴密に云へば、語彙を使用することそれ自らが常に變移の契機をなしてゐるとも云ふことが出來るのである。從つて相當距たる時點における二つの面は相互に著しい對照を示す。體系が組み替へられるのである。あらはれる畫面は異ふがパレツトの上で使つた色壺の數は同じであることもあらう。また異ふこともある。しかし語彙は常に各要素が張り合つてゐる統一體である。

例へば鐵道の仕事を掌る人と仕立に從事する人とでは同じく「仕事」と云つてもその內容が違ふ。前者は直に目の前

に鐵路を思ひ浮べるであらうし、後者は直ちに仕立台を思ひ出すであらう。語彙的に聯想される要素を拾つてゆくならば、前者は次にシグナルを思ひ、鐵橋を思ひ架線を思ふであらうし、後者は鋏・鏝・釘へと聯想は飛ぶであらう。前者の語彙は交通關係において廣く且つ細かく、後者には織物についてさうであらう。語彙は言語により、時代によつて異るのみならず、個人により職業により、また社會的の級(クラス)によつても決して一樣ではない。特に分業に向ふ近代社會においては職業用語は次第に分化發達する。職業による獨特な用語の集まりをそれぞれのスラングと云ふ。仕事の分化の程度の進むと共にスラングも一般の言語とは無關係になつて來るのもまた自然である。殊に特殊卑賤な職業(?)に從事する仲間の語彙は我々は全くこれを理解することが出來ない。彼らは理解せられない語彙を故意に作るのである。一般に一般語の語彙要素が特殊團體職業團體の語彙に入るときその指向するところが限局されると共に表現が明確となり意味が狹くなり特殊化されるものである。同時に多くは限局された方向に向つて意味が強く伸びる。反對に特殊團體から一般社會にこれらの單語が改めて「借用」せられたとき一般社會に適應するため意味は廣くなるけれども、元の特殊社會において付與せられた特殊な色彩の多くは保持してゐる。語彙の中における變化はかかる內部的借用關係から來ることも多いのである。日本語の語彙中における特殊團體職業社會から借り出されて來た要素は數へるに堪へない程である。鷹匠の言葉、俳匠の言葉、武家の言葉、商人の言葉……。この點について西洋の言語に關してはメイエの「如何にして單語は意味を變ずるか」(Linguistique historique et linguistique générale. Paris. 1921. 所收。二三〇頁以降殊に二四四頁以下)に興味ある叙述を見る事が出來る。

右の如く一般社會の言語、特殊社會の言語に關する語彙の外に、個人についてもまたそれぞれの語彙がある。內的外的の生活が個人において統一せられ、その統一せられた生活は他の個人における統一とは必然的に異る如く、個人の藏する語彙も性質範圍において決して他の個人のそれとは同一ではあり得ない。かくの如く個人によつて異る語彙は、社會關係においては、個人と個人との交渉折衝によつて一定の程度まで平均せられ相殺される。勿論その屬する社會關係の何れかによつて平均せられた平均語彙にも開きがあるに相違ない。政治社會、實業社會、學術社會にはそれぞれ性質と範圍とを異にする語彙がある。個人の語彙體系を第一次的體系とすれば、社會におけるそれを第二次的とすることが出來る。尤もこれは單に便宜上の事であつて發生的に前者が後者に先立つと云ふのではない。第一次的のものと第二次的のものとは大部分においては合致すべき筈であるが、しかし全然個人的なものは第一次中にあつて第二次中には存しないのが常であり、全く社會的なものは第一次中には單に交渉的にのみしか存しないのが普通である。この第一と第二次の語彙の使ひ分けも我々が社會にある限り常に苦心してゐるところであつて、最近輸入的に唱導せられる文體論の一つの問題の存するところもこゝにある。――我々は第一次的語彙によつて個人を見、第二次の語彙によつて社會生活の中に入り、社會の營みを開く事が出來る。從つて所謂標準語なるものゝ語彙は種々な語彙よりの一般社會的平均相殺若しくは選擇の上に立つものである。

我々はよく文人についてその使用した用語の數を無反省に議論することがある。しかしこの際にも右のやうな第一次的第二次的の觀念を有しなければならないのではあるまいか。シェークスピアは一萬五千から二萬四千の單語を使用したと云はれ、ミルトンは七千から八千語、新約には約四千八百の語數があると云はれる。聖書の場合は別とし

て、ミルトンやシェークスピアの場合においては、彼らが作品中に使用した單語の中には作者の日常使用するものの外に作品の要求する種々の社會の用語をも取り入れたに相違ない。自分の語彙より却て他人の語彙の方が多いかも分らない。彼らも仲間と語り家族と話す際には舞臺や作品中のすべての單語を使用したのではないのは明らかである。思ひの外に彼らの第一次的語彙は量的に局限せられたものであつたかも分らない。また作品外にも彼らの語彙は伸びてもゐたであらう。作品の用語は彼らの語彙とはまた別である。故に或作者の用語集を以てその作者の語彙の狀態を直に推量する事は出來ない。同樣にまた萬葉集の語彙を以てそのまゝ奈良朝全體の語彙を考へてはならないのである。——カェサルの語彙はガリア戰記にあらはれる限りにおいては決して廣いものとは云ふ事が出來ない。統計に取つて見たわけではないけれどもむしろ非常に狹いものと云ふべきであらう。それは彼の記述が主として軍事に局限せられてゐるからである。偉大な人物の彼が他の方面に自己の語彙を延ばしてはゐなかつたとは決して考へる事は出來ない。反對に鷗外は非常に語彙の範圍の廣かつた人である。一の事項を云ひ表はすに殆んど無數の表現方法を持つてゐる。しかし彼自身の語彙、第一次的のそれはどの程度であり、どの方向に伸張してゐたであらうか。所謂標準語の語彙も、幾多の語彙が交涉し交錯して一の中庸的目的に供せられる用語集にすぎない。範圍も定まらなければまた事實表現性も乏しいものである、元より拘束力はない。嚴密なる意味における語彙は個々人の如き生活統一者にのみ認めらるべきものであり、社會につき、標準語についてはむしろ用語集が認めらるべきが至當であらう。或言語の語彙といふときは實は第二次的語彙をさしてゐるのである。かくの如く論ずるのはあまりに嚴密にすぎるとも思はれるであらう。しかし作者の用語集、一社會の所謂語彙(用語範圍)はただ關係的に存在するのみであつて、關係の成立如何

によつてその廣さは大幅に振動する。その振動の極大限も我々は明確にすることが出來ないといふ意味において無限と稱することも出來るであらう。個人の第一次的語彙についても我々は自らその範圍を明確に自覺してゐない。卽ち限界が分らない。――この事には理由がある。

　同一の言語要素もこれを使用する場合と方法とによつてその價値は必ずしも一定してゐない。むしろ用例と共に常に價値を易へてゐると云ふことが出來るであらう。同一のフネ(舟・船)なる表現も、出船入船、黑船などにおいては少しづゝ價値のズレがある。船脚といふ場合の船は最早具體的な止まれる船を示しては居らない。しかも「走れる船」でもなくて、むしろ「船の走れること」をあらはしてゐるのである。言語要素は使用の度每に具體的價値を轉じてゆくのである。その極には思ひがけない事も出來る。亂 luan はもと𤔔と同じ意味の意義質で、字面の分析によつても知られる通り(台の上で兩手を以て繭をほぐすこと)、繭を解く、從つてまた一般に物を整へる意味であつた。しかし已に整へるものをほぐすことは亂すことになるのは當然である。治まれる平和をほぐす事は亂をなすことになるのである。漢文の亂の字が時にオサマルと讀まれまたミダス・ミダルと讀ましめられるのはそのはじめのホグスなる意味のあつた事を知らなければならない。亂ははじめ意味的に指向するところは唯一つホグス事であつた。これが相反する二つにわかれたのはその具體的な使用の度每に價値にズレが出來且つ累積されて行つたからであり、しかも或時代の語彙體系は常に現時的なものであることは我々が右に見た通りである。單語の由來は問題にならない。亂は和すべからざる反對の意味を抱きながら相對立することゝなつたのであつた(註)。ドイツ語の auf=heben「棄てる、留める」についても「上へ=揚げる」から同樣に理解することが出來る。用例に從つて意義質は無限に價値の數を增加するので

あり、增加した價値の或ものは遂に全く別の意義質と考へられるに至るものもある。語彙の範圍は限定の外と云はなければならない。――また言語には日本語の「……さ」、「……て」（手）、「……や」（屋）、その他漢語の「……人」の如く他の語について新たに語彙要素を構成してゆく要素がある（語構成）。これによつて形容詞「美しい」は「美しさ」なる名詞を構成し、「捕る」から「捕り手」、「爲」はシテを作る。しかしてこれらの要素が我々の內的言語において活潑に活躍して生命を失つて居らない場合、かゝる新構成語は、時々刻々必要に應じて無數にあらはれ來るものと思はなければならぬ。語彙の廣袤は無限の彼方まで伸びるものと思はなければならぬ。活動する言語の語彙は無限である。活ける言語の語彙には已存要素の外に、可能的潛在的なる未然的要素がある。我々が自らの語彙の擴がりを知り得ない最も大きい原因は恐らくは語彙自體のこの性質のためであらう。文法の働き方も同樣に無限であるが、語彙の擴がりも限りがない。擴がりが非常に限定されてゐるやうに思はれる幼兒の語彙についても、實際はなか〳〵限定出來ないものである（イエスペルセン言語、邦譯二〇九頁以下）。言語はもと〳〵無限なものである。こゝにヴィルヘルム・フォン・フンボルトに次のやうな意味の言葉がある――「あらゆる點において、またあらゆる時代において、言語は宛も自然と同じく、人間に對して常に無限なるものとしてあらはれる。人が如何ほど知りまた考へてゐたにせよ、そこには常に新しいものがあり、宛も無限の坑道の如くである。精神は絕えずそこに未知のものを發見し、感性は未だかくの如くには感じられなかつたものを常に得るのである。眞に新しい偉大な天才を以て言語が扱はれる度毎にこの現象が見出される。……」（「人間言語の構造的種々性について」プロシヤ・アカデミー出版フンボルト全集第七卷）。言語は無限の活動である。語彙も亦この活動の無限性のまゝに把握されたとき、眞の姿が把握されたと云ひ得られるのではある

まいか。「始めもなければ終りもない無限の」統一體ではあるまいか。

所謂語學の困難も、事實は文法よりは語彙にある。働く無限の語彙に關しては語學は眞に無限の仕事である。

註　「亂」の意味の二義背反性については別に小島祐馬博士の解釋がある。二つの意義はこの場合「辨證法的」關係にあると云はれるのである。これも一つの解釋である。また他の說ではオサマルの亂とミダルの亂とは元來字學の上から字が別れたのだとも云はれてゐるやうである。從つてそれによつて表はされる單語ももと〳〵別のものだと云ふのであるらしい（この亂の字の旁（ツクリ）についてはカルルグレンも繭の絲をたぐる hook であるとする說を取つてゐる）。――なほこの外に「飽」についても「倦イテイヤニナル」といふ意義の外に「德ニ飽ク」の如く「浸リタノシム」といふ意義のあることに注意して置きたい。同樣に種々の解釋の餘地もあるかも分らない。かういふ例は支那の古典に相當多いやうである。―本項は新村先生の御示敎に負ふところが多い。

二　語彙の廣さ（範圍）

右のやうな次第であるから語彙の範圍を明確に限定することは非常に困難な仕事である。形容詞がいくら、名詞がいくつ、動詞が何程などとはとても算へつくすことが出來るものではない。語彙は品詞の區別などを超越して働くものである。もし明確に枠の中に仕切ることが出來るならば、もはやそれは眞に働く言語の語彙ではない。これは第一次的の語彙についても第二次的の語彙についても同樣の事柄である。

のみならず單語はその用ゐられる瞬間に一の全體性として具體的に生ける統一體であつて、實際上同一の單語が場

合々々に應じて適當な意義を繰り出すのではない。單語は言語活動中に存する限り使用せられる際は常に嚴密に一意的であり、多意的ではない。この點から云つても活動する語彙の範圍は容易に決定する事が出來ないのである。

しかしながら如何に活動するにもせよ、語彙は要するに我々の手段であり、利用せられる財である。何らかの方法を用ゐて凡そのところをでも見究めることが出來ないものであらうか。外部から表現の手段を算へて行つたのでは右にも明かにした如く實際々限がない。外部から行かないで内部からゆくのである。一々の單語、一々の意義質からゆかないで内容から、意味からゆくのである。私は具體的に試みつくした譯ではないけれども、かうすれば語彙の大體の廣袤は推知せられやうと思ふ。のみならずこれによつて語彙の新らしい性格も發見出來、一の言語の語彙と他の語彙との比較も出來るだらうと思ふのである。これは全然私の新らしい考へでもなく、我國では古く節用集あたりから試みられてゐるところであるが、たゞ私はこれを完全にし、新らしい結果を導かうとするに過ぎない。

それは節用集のやうに

一　時間（この中には時刻關係も含ませる）
二　空間、位置、形
三　量（多いさ、大きさ、數……）
四　事象（出來事、關係性、本質性……）
五　視覺世界
六　無機世界、物質

などと大別してゆき、精神方面においても

思考

感覺

科學(學問)

社會

などといふ風に進めてゆく。この大別だけで私の見るところでは凡そ二十個位のものが出來ると思ふが、この大項の下に更に小別けして第一項ならば、

イ　時間關係一般

ロ　過去

ハ　現在

ニ　未來

その他

同時

直ちに

後程

とか云ふやうに小別けしてゆく。その他「遲く」とか「稀に」とか、また「度々」「繼續」などといふ項をも設けねばなる

まい。そしてその各々單に名詞・動詞・形容詞・副詞のみならず、間投詞は固より、助辭や接續詞や身振りを明らかに想像せしめるやうな表現手段まで入れてゆき、更にはそれに關係した內容を持つ語構成要素まで入れてゆくのである。固より所謂熟語や合成語も略してはならない。

例へば右の「同時」といふ項については

同時、同時性、共存、共榮、共立……

同時代、同時代性……

共時、共時性、共時態……

今の世、同じ年、同時代人……

の如き名詞の外

落ち合ふ、足並をそろへる、手を携へる、雁行する、共存する、伴ふ、隨伴する、連なる……

の如き動詞、またこれらに應ずる形容詞、その他

その時、時に、共に、一度に、一諸に

の如き副詞

手に手を、相共に

のやうな熟語

さア

といつた風の「身振りの言葉」なども收錄するのである。勿論かうした框は集められる表現手段に應じて設けらるべきであつてはじめから動きのとれないものであつてはならない。新しい框が必要ならばその言語の語彙、或はその時代のその言語の語彙はその方面に非常に表現活動をしてゐることになるのである。そして我々がかゝる分類をするのは、もと〳〵語彙の表現活動の分野を知るためである。

かうすれば、我々は或一つの概念或は意味、或は要するに內容に關してその語彙が如何程豐富であり、如何程表現的に嚴密であり如何程微妙であるかを知ることが出來る。のみならずまたかくする事によつてその語彙の表現的の强みは何れの方面にあり、弱みは何れの方面にあるかを知ることが出來る。從つて他の言語の語彙に比較して方面的强弱の判斷が出來る。强弱の質も知る事が出來る。項目の數によつて語彙の廣さを推知する事も出來る。

一體人間は內界と外界を問はずその有する世界の現象を明確に把握した場合には言語において明瞭な獨立的の表現を與へ、不明確な把握には關係的に表現してゐるものである。無關心な世界には表現を有しない。從つてこの關係を逆に云つて外來語を受け入れた場合には或は新しい認識を賦與せられたことになり、或は新しい認識の仕方、新しい感覺の起し方を覺えたことになる。卽ちその語彙によつて或る時代のその言語團體の有つ文化世界を窺ふことが出來る。勿論このためには網羅的に單語を取扱はなければならない。そして橫斷面的に、所謂共時的に。

一般の流通語だけでなく、特殊な社會の語彙までも、高低を問はずに。

語彙の硏究もこの程度に至れば硏究者の母國語においてゞなければ出來ない（しかも、我々の母國語は切にこれを要望してゐるのである）。

こゝで私は方言研究に望みたいことがある。生活が違へば認識も異なり、感覺も等しくない筈である。方言の研究や整理にあたつては單に表現の外的なるものに捉はれずに内的なるもの、意味に重きを置いてほしいのである。與へられた標準語の單語にあたる方言語彙を漁つたり、與へられた框の中だけで仕事をせずに自由に框を立て表現を集めて戴きたいのである。親族關係のやうなものにしても、地方によつては我々の知らない關係があり、感じ方見方があり、表現や云ひまはしがそれらにあらうと思はれる。親族關係もいつの世にも、またどこへ行つても同一であるといふ譯のものではないのである。簡單に云つてもドイツとロシヤでは非常に異なるものがあり、しかも何れも時代によつて――僅かの時の隔りの中に――變化があり、表現も變化し交替してゐるのである。――思考や感覺の次においては殊にさうであらうと思ふ。何れにしても意味内容に重きをおき嚴密でなければならないと思ふ。方言を文學に利用したいと云ふのも新しい内容新しい感覺がほしいからの企なのである。さうでなければ折角の企も無意味であり有害である。方言における語彙の測定は重要であると思ふ。

* * *

以上の外、語彙の研究としてはアリストテレースも觸れてゐるやうな語彙の魔術的効果の研究、ユーフォニーの研究(ユーフォニーと云つても單語に關しての場合と「云ひまはし」に關しての場合とがある)、或は象徵的價値の研究(註)なども興味あるものではあるけれどもそれらは語彙の特殊問題に屬するものであり(そして私も曾て部分的ながら觸れたことがあり)、全體としての語彙の一般的研究には直接關係しないからここには觸れない。

註　この方面では日本語にも多くの興味深い例があるが、私が兼ね兼ね最も力强く感じてゐるのはホメーロスの

イリヤス第一卷四十九行の deinē de klaggē genet' argureoio bioio.（直譯「怖ろしき響ぞ銀の弓より立ちにける」）の最後の二語（「銀の弓」）である。-oio bioio の二韻脚には如何にも強い弓弦の唸り響く感じがあるではないか。

語彙の問題を終へるに當つて云ひ落すことの出來ないのは品詞の問題である。この問題は非常に難かしい。日本でも西洋でも古くから多くの試みがあるが、何れも最終の解決に達したものとは思はれない。この問題の困難なのは語彙が品詞に別け切られない事にある。常に剩餘を殘すことにある。品詞論に關する種〻の角度からする多くの試みはすべてこの剩餘を割り切らうとする試みであると云ふことが出來る。しかし前にも述べた如く働く語彙はその廣がりにおいて無限であり、その組織において區劃を超越した連續體である。別け切らうとする限り、何れの品詞論も、自ら破綻するか、或は對象を殺すかの何れかである。――この問題に關する最近の著作の比較的すぐれたものとして次の二つを擧げて置きたい。Viggo Brøndal, Ordklasserne. Partes Orationis. (Studier over de sproglige kategorier). コペンハーゲン、一九二八。及び同人著 Morfologi og Syntax. Nye bidrag til sprogets theori. コペンハーゲン、一九三二。

國語科學講座
（第十二回配本）

昭和十年三月二十五日印刷
昭和十年三月三十一日發行

東京市神田區錦町一丁目十六番地
編輯兼發行者 株式會社明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 株式會社明章印刷所
代表者 細谷祐三

發行所 東京市神田區錦町一丁目 株式會社 明治書院

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03001 8238

P
305
I95